

学習意欲を高める授業設計

教壇には昭和 63 年度から立った。当時、「新しい学力観」（※新しい学力ではない）がクローズアップされ、特に「意欲・興味・関心」が重視されはじめた。
自分の教員人生は、スタートからずっと生徒・児童が「意欲・興味・関心」をいかに持って学ぶかが大きな問題意識になっている。

当時、授業研究の理論の一つに John. M. Keller (フロリダ州立大学名誉教授) の「ARCS 理論」があった。内地留学していた知り合いの教員もこの理論で授業設計を行っていたし、私もいろいろな講演会でこの理論に触れた。

今日でも、学習意欲を考えると、この理論が頭をよぎる。

ARCS 理論

Attention	注意、おもしろそう
Relevance	関連性、やりがいがある
Confidence	自信、やればできそう
Satisfaction	満足感、やってよかった

目標に向かう
自分でやれた
身についたものが使える
認めてもらう
努力は正しく評価される

ARCS モデルの利用手順

Define 学習者分析、ARCS のどこが不足か、どうして意欲がないの？
↓
Design 方略の取捨選択（何も付け加えない）、どのタイプの作戦が必要か？
↓
Develop どこをなおせばうまくいくのか（形成的評価）
↓
Pilot

注意を引く … 目新しさで注意を引いてもいいじゃないか (Keller)

↑

（これを聞いたときはとても参考になった。やはり、授業では何かインパクトが必要なのだろう。）